

種 口 ん 女



R-18
adult only

樋口さん



樋口さんは僕のサークルの後輩だった



いつか樋口さんが暗い表情で窓の外を眺めていた

車窓からは海がよく見えた

樋口さんは普段笑うときと同じ目をしていた



綺麗なひとだった

いつも悲しそうに笑うひとだった



僕は樋口さんが笑うときは

それ以上他人に踏み込まれたくない時なのかと思った

そういう時の樋口さんの目を僕はなぜかエロいと思った

樋口さんは二年前までアイドルだった

事務所がゴタついて、
そのときにユニットが
解散して、そのまま
樋口さんもアイドルを
引退したらしい。

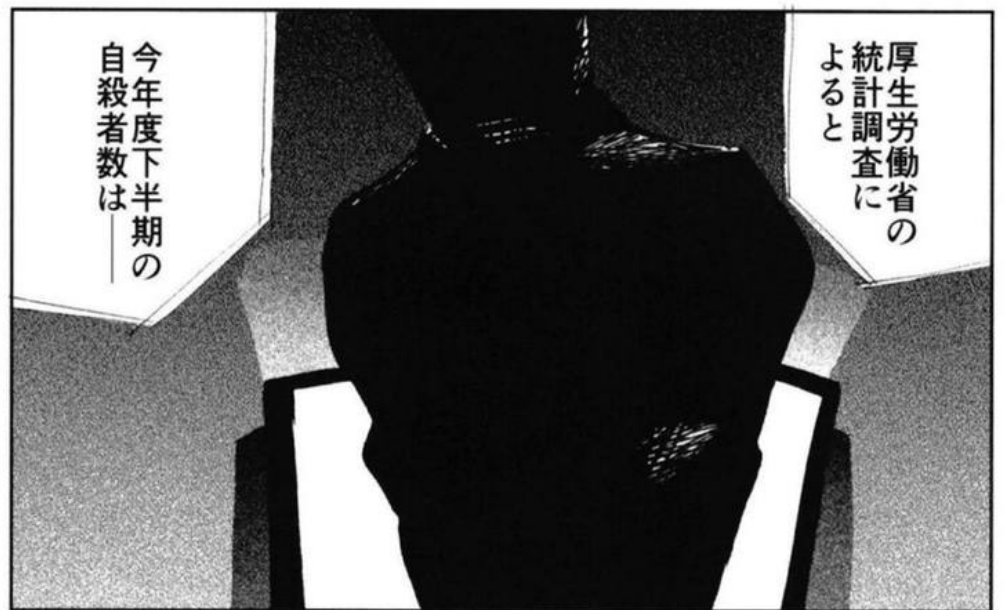
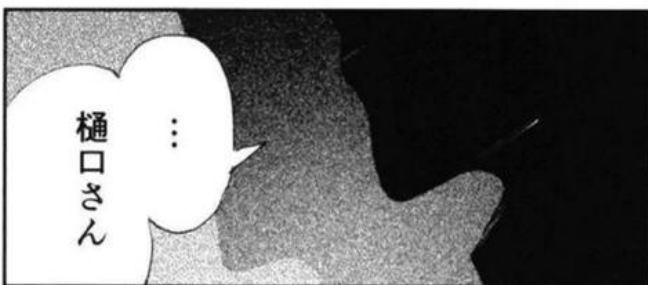
ただ僕は昔の話を
詮索しなかった。
多分樋口さんが僕の
彼女になったのは
それだけの理由だ。

ある閉じられた
人間関係の中で
考え無しの人間同士が
つがいになる。
学生にはありふれた話だ。













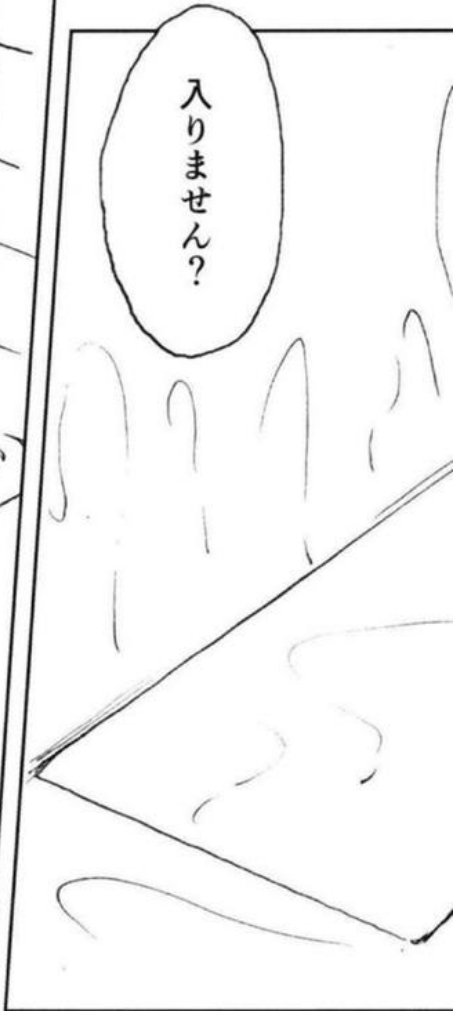
——また
社会情勢の先行きが
不透明であることから
今後の……



ねえ
お風呂

はあ

はあ



入りませんか？



ジロジロ
見ないで
気持ち悪い

ひち...
ん



...



樋口さんは献身的に
フェラチオをしてくれた。

現代では
驚くべきことだった。

僕には
樋口さんは利発そうに
見えた。

僕らの世代の女性にとって
性的魅力は経済的な利益の
手段であるか、攻撃すべきもの
あるか、もしくはその両方の
ようだった。

僕らの世代の女性にとって、
女らしさは男らしさ以上に
軽蔑されるべきものとされている
ように思えた。

利口であることと
無条件でセックスを楽しむ
ことは両立不可能に
思えた。



セックスを通じて他者と
心を通わせる、
そういう現代では本当に困難な
瞬間が僕と樋口さんにはあった
気がした。



だから、樋口さんが僕の
ペニスをやぶることを
楽しんでいるように見えたのは
ほとんど奇跡的に思えた。



最悪

樋口さんは
気まぐれに
僕のアパートに
来るようになった

ただいま

お

来てたんだ

ん

今日
遅いね

うん
疲れた



服

脱がして



ん

なに？



はいはい

樋口さんと僕は
あまり言葉は
交わさなかった



会う度
何度も何度も
セックスをした



はっ

さね

はっ

はっ

はっ

はっ

あっ

あぁ

はっ

はっ





どうしたの
それ

今日むかしの
知り合いに
会って

これいら
ないから
って押し
付けられ
た

弾けるの？



全然

なにそれ

僕が見た樋口さん
の中で一番澄んだ表情
だったと思う。



樋口さんはギターを弾いた。
下手クソだった。
樋口さんは歌った。
僕は心の底から綺麗な
歌声だと思った。

僕と樋口さんとを
つなぎ留めていた無力感は、
樋口さんから
失われつつあったことに気付いた。
二人の関係は
終わりつつあることに
気付いてしまった。
僕の世界だけが、
未だに凍結されたままだった。



大丈夫?

指切った...



った...



ねえ

舐めて?



れろ

れろ

ふふ

犬みたい

くすっ

くちゅ



あゝ

あゝ

んゝ

あゝ

んゝ

んゝ

あゝ

んゝ

んゝ



はっ

あーっ

あーっ

はっ

ぎゅっ

あーっ

僕と樋口さんとの
紐帯は完全に
消えてしまった
ように思った。

樋口さんはほんの少し
生きる動機を
回復したようだった。



あ
別れませんか？
私たち



先輩
ねえ



分かりきっていた

理由だけ
聞いていい？

先輩
とっくに分かっ
ているでしょう？


わざわざ訳を
聞くなんて
どこまで愚鈍なの
あなたは

あなたは
段階を踏むべき
タイミングで
踏み止まれた
だけと段階を踏むべき
タイミングで
踏み越えられなかった




そうか

結局のところ、僕には
どうすることも
できなかった。




愛とは水面に
投げ込まれた石から
広がる波紋のようなもので、

始点が最も美しく波立ち、
その後は急速に減衰していく。



愛は時として一人の人間の
人生を生きてゆくのに
十分なものにするだろう。

しかし、
愛を持続させ続けるのは
ほとんど不可能だ。



こういう時、
人は自身の人生に
なにか行動を起こすほどの
動機が一つも無いことに
気付く。

僕以外の世界はどんどん
合理的に閉じられてゆき、
僕だけが不合理な存在に
思えた。

さようなら

僕の人生は完全に過去に取り残されてしまった。未来について考える気力は無かった。

その晩は一人で映画を観た。

可も不可もない出来だった。取り立てて言うべきことは何もなかった。

帰り道、安い赤ワインと睡眠薬を買った。

樋口さん

初版発行：令和三年十二月三十一日

著者：あすぜむ

発行：イマソリドンダイ

連絡先：usthem0102@gmail.com

印刷所 同人誌印刷ドットコム



イマソルバンダイ